芸能山城組公演
アキラ　じぇごぐだん
逢燦杰極譚
2021年5月29日(土)
なかのZERO大ホール

逢燦杰極譚（アキラじぇごぐだん）

プログラム

第一章
邂逅覚醒（かいこうかくせい）

作曲　山城祥二
案内人　松本純子

転生（てんしょう）　『輪廻交響楽（Ecophony Rinne）』から
宇宙を征くロケット　『星の子供たち』から
黎明（カオス）　『翠星交響楽（Ecophony Gaia）』から

第二章
解明創発（かいめいそうはつ）

解体師　本田　学

―― 休憩 ――

第三章
逢燦杰極（アキラじぇごぐ）

作詞・作曲　山城祥二
案内人　松本純子

金田
クラウンとの闘い
変容
荘厳陀羅尼（しょうごんだらに）
ケイと金田の脱出
未来（レクイエム）

演出・指揮　山城祥二
出　演　芸能山城組
協力出演　野呂尚史（ドラムス）
照　明　山形多聞・森下　泰
舞台監督　神林　悟（クリエイト大阪）

主催　芸能山城組公演実行委員会
助成　公益財団法人東京都歴史文化財団
　　アーツカウンシル東京

ごあいさつ

本日はようこそお越しくださいました。この公演では、これまでアニメ映画『AKIRA』のサウンドトラック、劇伴音楽としてお楽しみいただいてきた『交響組曲AKIRA』をもとに、コンサートホール・ライブ作品として新しく創った〈逢燦杰極（アキラじぇごぐ）〉を初演いたします。

この作品は、『交響組曲AKIRA』発表直後から作曲者・山城祥二が構想を温めてきたもので、映画の舞台である二〇一九年に本格的に創作を進め、二〇二〇年五月にお披露目する予定でした。しかし、COVID−19の影響により、公演は二度の延期を余儀なくされました。そうした中にあって寄せられたお客様の温かいご声援、そして関係者の皆様の強力な応援に支えられて、本日を迎えることができました。心から御礼申しあげます。

公演第一章では、バリ島の巨竹打楽アンサンブル〈ジェゴグ〉の響きを日本の風土に根付かせて強化発展させ、人の声との融合も模索して創作したオリジナル楽曲をお聴きいただきます。第二章では、ステージ上のジェゴグを解体し、日本ではあまり知られていないその響きの秘密を解き明かします。そして第三章では、ジェゴグとの親和性・協調性の高いさまざまな文化の楽曲や祈りが共生し、人の声、鍵盤楽器、電子楽器がひとつに融けあった新しいAKIRAの音楽、〈逢燦杰極（アキラじぇごぐ）〉を初演します。

〈逢燦杰極（アキラじぇごぐ）〉の生命力あふれる響きによってご来場の皆様が少しでも元気になられますよう、心を込めて精一杯、演奏いたします。どうぞお楽しみください。

令和三年五月二十九日

芸能山城組

AKIRA LIVE

ARTS COUNCIL TOKYO

文化でつながる。未来とつながる。
THE FUTURE IS ART
Tokyo Tokyo FESTIVAL

〈逢燦杰極譚〉によせられた

メッセージ

2021年 AKIRAコンサートに寄せて

Jordi Casadevall
ジョルディ・カサデヴァル

「AKIRA」の音楽が、私の人生にいかに深く関わってきたか、改めて驚いています。90年代初頭、十代の私は、西洋ポップカルチャーに起こった日本アニメのブームの中でこの映画に出会い、同世代すべての若者同様、魂が吹き飛ぶほどの衝撃を受けました。

謎に包まれたこの映画の中でも、私にはオリジナル音楽が最大の謎でした。単なる空想ではなく、より「リアル」な感覚を与える音楽は、他のどのサウンドトラックにも共通点を見出せません。古代からの伝統に深く根を張りながらも激しく現代的であり、時を超越しています。この音楽は、水面下に隠された実体を聴き手が掘り起こすのを待っているのです。そこで私は、憑かれたように繰り返し録音を聴き、その謎解きを試みました。そして辿り着いたのがバリ島でした。

数年後、私はこの謎の大きな源泉、伝統的なガムラン音楽をバリ島で学び、さらに数年を経て、スペイン初となるバリ島ガムラン演奏グループ Gamelan Penempaan Guntur を創設する栄誉に恵まれました。このグループは芸能山城組の「義理の息子」とも言えますが、その影響力から、他にも数多くの知られざる「義理の息子」が存在するのかも知れません。

芸能山城組は西欧のツアー経験がありません。ちょうど十年前、愛する芸能山城組のAKIRA東京公演を知り、私は即座に訪日を決めました。そして思いがけず山城先生に直接お会いできたことは、一生の宝になりました。以来十年にわたる素晴らしい親交に対して、私は小さなお返しをしました。それはハイパーソニック・エフェクトの研究のために、バシェ兄弟が創り出した「音響彫刻」を紹介したことです。

AKIRAがすべての始まりでした。その音楽は私の中で雪だるま式に大きくなり、人生にもっとも特別なチャンスを与えてくれました。AKIRAは、西欧の人々が非西欧文化に目を向ける道を拓き、より良い世界のために、そして知識と文化を通じて人間であることの意味をより深く理解するために、皆さんのアートが大きく貢献していることに疑いはありません。皆さんの惜しみない貢献にTerima kasih banyak（ありがとうございます）、そしてAKIRAが末長く生き続けますように。永遠の感謝と愛を込めて。

（Gamelan Penempaan Guntur、バシェ音響彫刻ワークショップ）

『AKIRA』の物語と身体の現実をつなぐ芸能山城組

中川 大地

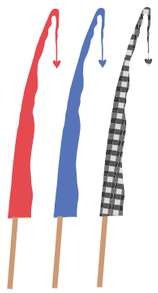
日本のメディア文化史を通じて、大友克洋監督の映画『AKIRA』が果たした役割はきわめて特異だ。とりわけ世界へのインパクトの大きさと深さでは、いまだ他の追随を許さない。

原作漫画連載開始の1982年から戦後37年分を未来に折り返した2019年、禁忌のエネルギーの暴発で崩壊した「ネオ東京」を舞台に据えた本作は、SF活劇の体裁ながら、もういちど焼け跡から戦後日本をやり直そうという情念を底に秘めた作品だ。2020年に再び東京オリンピックが招致されるのをよそに、無軌道にバイクを駆る少年たちが革命闘士らの思惑と絡みながら、謎の少年「アキラ」の超能力をめぐって権力との攻防を繰り広げる物語は、お仕着せの国家イベントではなく、ボトムアップの祝祭劇としてこの国の再生の道をフィクショナルに探る試みでもあった。

そうした想像力をアニメイトするにあたり、現代都市の最先端に祝祭を甦らせる「新宿ケチャまつり」をはじめ、世界諸民族のパフォーマンスを修得・研究・再創生することで「行動する文明批判」の唯一無二の活動を続けていた芸能山城組の音楽の力が見出されたことは、まさに歴史の奇蹟だったと言うほかない。

劇中のアキラの力はもちろん核兵器の隠喩だが、他方では人間誰しもが内包する本来の活性の謂（いわれ）として両義的に表象されていた。その後者のありようを、物語とは異なる危機が覆う2020年代の現実に可体験化する媒介（メディウム）。それこそが山城組の実践なのである。

（評論家／編集者）



AKIRAはメディアを革新し続けた

麻倉 怜士

AKIRAの重要な功績はメディアを革新したことだ。そもそもAKIRAはニューメディアと共にあった。劇場公開の1988年にLD、2001年にDVD、2009年にブルー・レイ・ディスク（BD）、そしてUHDBDが2020年……と、今日までAKIRAはその都度、新パッケージメディアにてリリースされてきた。

逆にAKIRAはメディアを革新した。一例がBD。ハイレゾ音声が使えるメディアなのに、誰もそれを使おうとしなかった時、BD・AKIRAは鮮やかにハイレゾ（山城先生的にはハイパーソニック）を謳った。その効果は絶大だった。AKIRAは全編を通してバイクの暴走音、急ブレーキ音、急加速のキィー音、転倒音、けたたましいクラクション音、空を裂くヘリコプター回転音、ピストルの発射・爆裂音……のノイズ系SE・衝撃的なSEが横溢するが、それらがまったく不快でなく、心地好い鳴りっぷりだった。ハイレゾ効果は絶大であった。AKIRA BDはその後のハイレゾメディア、BDオーディオの先駆けとなった。

最新のUHDBDでも革新があった。音声で採用された独自の「ペガサス処理」は、圧倒的な臨場感とリアリティを音に与えた。SEのそれぞれで、ある帯域はレベルを持ち上げ、ある帯域は下げる、もしくはカットする……という複雑な帯域調整の成果は、もの凄い生命力に溢れる音に結実した。ダイアローグでは、暴走族各メンバーの特徴的なキャラクターが生々しく、音楽とSEの融合度がひじょうに高い。これもUHDBDの音の革新だ。

新しいメディアはAKIRAの新しい魅力をひき出し、AKIRAはメディアにさらなる魅力を付与した。そんなハイテンションな麗しい関係が、このふたつにはあった。

（オーディオ・ビジュアル／音楽評論家）

『山城流 Sound Making
——輪廻交響楽～交響組曲 AKIRA

高田 英男

山城先生との出逢いは1986年「輪廻交響楽」レコード制作の場で、ビクタースタジオ・エンジニアプロジェクトチーム（チーフ録音監修依田平三エンジニア）の中で、私はチーフエンジニアとして録音&ミックスを担当しました。

輪廻交響楽の録音では山城先生から、バリ島の民族楽器（ジェゴグ）を使った楽曲のお話がありましたが、ジェゴクという楽器名を初めて教えていただき、正直どの様な音かも理解していませんでした。そんな中、先生から「高田さん、何事も本物を体験することが大切です」というお話をいただき、バリ島でジェゴクの演奏を体験することができました。

巨竹打鳴楽器を、車のタイヤのゴムをスティックに巻付け、力の限り叩いている迫力に驚くと同時に、本物を体験するとは楽器の音色を体験することではなく、演奏者の気迫、精神など、聴覚・視覚・精神すべてを体感することで本物のサウンド創りに繋がることを教えていただきました。

山城先生は、人間にとっての超高周波帯域音の重要性を当時からお話され、今、時代が追いつき、ハイレゾリューションフォーマットでの録音が日常化しています。

さらに、『輪廻交響楽』～『交響組曲AKIRA』まで、先生の音楽は3D立体サウンドで組み立てられており、それを2CHステレオで表現する難しさを体験していますが、今、イマーシブ（没入感）を含めた3Dサラウンドによる音楽制作が始まって、漸く時代が追いついてきています。

今回のライブは新たなアイディアにより、当時の録音を超えたライブ『交響組曲AKIRA』の誕生～更なる未来への予感です。ライブステージにおける新たな時代への体験、楽しみです。

（日本音楽スタジオ協会会長・レコーディングエンジニア）

「AKIRA」4Kリマスター
そのサウンドと実存感

名倉 靖

我々パッケージメディアを取り扱う録音エンジニアは、常々「生で発せられた音が録音した段階で別なものへと変化してしまう」問題と向き合い、いかに「録音物」として魅力的なサウンドを作れるかを試行錯誤しています。

「AKIRA」4Kリマスター作業を行うにあたり、山城先生からは「今を感じる音にしたい」とリクエストがありました。

元々の音源は時代を考えると「想像するだけで身震いする」ほどの熱意と情報量を持って作られていますが、「録音物」としての音はやはり一昔前の音として聞こえてしまいます。

そこで、まずはその部分をメインに調整をし山城先生に聴いていただいたのですが、その際に、先生自らエンディング曲である「金田」を調整し、私に聴かせてくださいました。

それは、竹で出来た楽器「ジェゴグ」、その滲刺とした音色を「録音物」として魅力的に再現したもので、その音は私のその後の作業の大きな指針となりました。

そうして完成した音源は、その後の山城先生の手による「ハイパーハイレゾ」作業を経てマスターとなるのですが、そのサウンドはまさに衝撃でした。

そこには「録音物」としての魅力を追求したあの「ジェゴグ」の音が、実存感を持ってそこに存在していたのです。

「録音物」としての魅力的なサウンド、その一つの完成形として「AKIRA」4Kリマスターを山城先生と共に皆様にお届けすることが出来たことは、大変光栄な、また良い経験となりました。

（録音・音響監督）

「AKIRA」と「東京リボーン」

寺園 愼一

「東京リボーン」は、オリンピックに向けて大変貌する東京の姿を追った番組です。難しかったのは、決して開発礼賛番組にはしたくないということでした。とはいえ、長期間取材に応じてくれた建設会社の方などの情熱、奮闘も讃えたい。そのジレンマがつきまといました。そこに突破口を作ってくれたのが、芸能山城組の「AKIRA」です。

さまざまな表情を持つ「AKIRA」のサウンドは、時代を経ても色あせることなく、都市の巨大なうねり、変わりゆく東京の姿、人間の欲望を、音楽という形で見事に表現してくれ、今までにない新しい番組へと昇華することを支えてくれました。安易な感情移入を拒否し、人間存在のありようを問いかけるサウンド。わかりやすい勧善懲悪ではなく、文明や人間が奥底に潜ませている欲望を問いかけてくるようなサウンドです。だからこそ、開発賛成か反対か、オリンピック賛成か反対か、という単純な結論ではなく、東京というモンスターはこれからどこに向かうのだろうかという深い読後感をもたらしてくれたのではないかと思います。

今これを書いている時点では、オリンピック開催をめぐる議論が続いています。まさに世界がひっくり返ってしまっています。オリンピックを見据えてスタートした東京リボーンですが、当初の番組の思惑を遥かに超える深みを作ってくれたのは、「AKIRA」でした。「AKIRA」なしには「東京リボーン」はありませんでした。

（NHK大型企画開発センター プロデューサー）

”この先“への予感に満ちた交響組曲 AKIRA

高橋 里英子

楽曲「金田」に出現する落雷、旋回するヘリ、ジェゴグの響き。冒頭わずか30秒で映画『AKIRA』の世界像を凝縮するこの音楽を、実は研究者でもある山城先生が作曲していると知ったとき、この音の存在を、このストーリーを、もっと世の中に知らしめたいと感じました。『AKIRA』の音」を展示するという日本科学未来館が挑戦した企画は、「科学」あるいは「研究」というものが、アートに対してどのような貢献ができるのか、山城先生という存在から、ひとつの答えを示すことを目指しました。

熱帯林に広がる、人間の可聴範囲を超えた高周波。近代的な都市ではテクノロジーの影に潜んでしまった生命力に溢れた祈りの肉声。先生が採集した音たちは、珍しいだけのものではなく、その先に「何かがありそう」という不思議な予感に満ちています。

フィールドワーク（学術研究）により様々なコミュニティーを訪れ、常人では感じとれない音や時間の存在を感じ取り、作品へと昇華する。そのプロセスにより創り出された音楽は、ネオ東京のように混沌とした都市の中で生きる私たちに、”この先“を示しているように思えます。本公演もまた、未知の音に多くの人が出会い、発見する場となることを願っています。

（日本科学未来館 展示開発課 調査・企画担当）

第一章 邂逅覚醒（かいこうかくせい）

曲目解説

アニメの大友克洋監督と音楽の山城祥二とバリ島のジェゴグとを結びつけ、世界のアニメ音楽の流れを変える奇蹟を芽生えさせた大切な曲、『輪廻交響楽』の〈転生〉で幕を開けます。

バリ島の輝く太陽と豊かな雨を浴びて育った長大肉厚な竹の発音体を高度にシステム化し、迫力の超重低音から軽やかな高音までを奏でる打楽器オーケストラ〈ジェゴグ〉。組頭・山城祥二は一九八〇年代初頭、復活したばかりのジェゴグに注目し、現地録音のCD化等を通じてそのすばらしさを国際社会に紹介してきました。山城組は一九八四年のバリ島調査研修合宿でジェゴグと本格的な出逢いを果たして以来、現地の伝統曲の演奏を学ぶとともに、楽器一式を譲り受けて日本に運びました。そして、さまざまな試作を経て4音階構成のジェゴグにさらに1音を加えた〈5音階ジェゴグ〉を世界で初めて開発し、合唱や電子楽器との融合を試み、『交響組曲 AKIRA』をはじめとするオリジナル作品を発表してきました。そして今日、〈逢燦杰極（アキラしとごく）〉がお目見えします。

1 転生（てんしょう）

『輪廻交響楽』（1986）から

地球生態系の循環メカニズムを讃える『輪廻交響楽』は、山城組が初めて本格的にジェゴグを取り入れたオリジナル作品です。

組頭・山城は、ジェゴグの響きが個性豊かでありながら、他の楽器や歌声とも共生しうる卓越した包容力をもっていることに注目しました。そして、現地から輸送したばかりのジェゴグを使い、手探りながら人間の声との共存調和に挑戦すべく書き下ろしたのがこの作品です。世界のトップアーティストたちでは意に満たなかった大友克洋監督に「芸能山城組にAKIRA の音楽を」と決意させた作品に他なりません。

〔転生〕は『輪廻交響楽』の最終章として、「生命の復活」をテーマにしています。遥かな森から深く静かに流れ寄るようなジェゴグの低音に包まれて、印象的なメロディが瑞々しく立ち上がり、のびやかに力強く生命の復活を謳います。ついで、軽やかで愛らしい〈ひかり、かぜ〉のメロディがころがるように奏でられます。一転、巨獣の疾走を思わせるジェゴグの変奏による重低音部が現れ、一気に駆け抜けたかと思うと、〈ひかり、かぜ〉のメロディが再現します。そして、静寂の中から〈転生のテーマ〉が流れ出すと、これに歌声が加わってフィナーレを迎えます。

相当に複雑な構成をもつこの楽曲が、ジェゴグ部分はたった4音階、その他の部分もほとんど5音階で作曲されている事実は、ひとつの驚きです。それを実現するために散りばめられた斬新な手法の数々、そしてジェゴグによる作品創りへの初挑戦にもかかわらず、楽曲のもつ高い精神性と自然性はゆらぐことがありません。

2 宇宙を征くロケット

『星の子供たち』（1989）から

『交響組曲 AKIRA』（1988）以後も、ジェゴグの潜在活性を引き出す実験的な作品創りが続きました。そのひとつである『星の子供たち』はジェゴグの響きと人間の声との融合をさらに前進させた作品で、神奈川県横浜市政一〇〇周年・横浜開港一三〇周年を記念して開催された〈横浜博覧会〉テーマゾーン宇宙館の映像作品のために創られました。今宵は、ロケットの打ち上げ映像を彩るクライマックス部分を再構成してお聴きいただきます。

たったひとつの音高の音が楽器構成を変えつつ、リズムパターンの異なる入れ子奏法を順次積み重ねて、延々と奏でられます。それゆえに、各楽器の音色の多様性というジェゴグの魅力が最大限に引き出されています。一部の楽器が音高を変え、少し遅れてその他の楽器がその音高に追随する進行と独特のポリリズムによって複雑に揺らぐジェゴグの持続的ハーモニーという楽曲構成法は、この楽曲で初めて創出されました。ここに、同じく音高の変化をほとんど伴わない真言密教の声明が重なり、声明とジェゴグがシンクロしながら次第に高揚するなか、ジェゴグによるメロディラインが奏でられます。そこにブルガリア女声合唱風のコーラスが加わり、文化の系統を異にする声の響きをも違和感なく溶け合わせるジェゴグの響きの包容力がいかんなく発揮されています。

3 黎明（カオス）

『翠星交響楽』（1990）から

ジェゴグの楽器としての活性を究め、それをフルに発揮できるように創られた作品として、大阪で開催された〈国際花と緑の博覧会〉で最大の観客を集めた巨大壮麗な噴水システムのための野外オペラ作品『翠星交響楽』があります。そのプロローグ、地球誕生をイメージした楽曲がこの〔黎明〕です。多様な楽器構成をもつジェゴグの生のサウンドを存分にお楽しみいただけるよう、ジェゴグ以外の音源を一切使わない特別アレンジで演奏します。

冒頭、「これぞジェゴグ」という大地を揺るがすばかりの重低音がうねりとなって轟（とどろ）き、みるみる押し寄せます。続いて小さな楽器の硬質な音が飛び出して16ビートのパターンを刻みはじめ、メロディラインへと展開し、やがて地殻変動の地鳴りのようなジェゴグの行進が始まり、駆け抜けます。全楽器のユニゾンによる印象的なファンファーレを経て、弾むようなジェゴグの歌が重低音によって歌い上げられます。モノトーンの響きから一転して現れる躍動感あふれる旋律は聴きどころのひとつです。軽やかな高音楽器たちがそれにのって遊び始めると、ジェゴグの響きはクライマックスを迎え、高らかなファンファーレとともに幕を閉じます。ジェゴグによる表現を自家薬籠中のものとしたこの作品は、さらにそこから一歩を踏み出す山城組オリジナルの〈杰極（じえごく）〉開発への契機となりました。

（仁科エミ・小野寺英子）

『翠星交響楽』録音中の高田英男氏と山城（1989 年）

『輪廻交響楽』録音時（1985 年）

バリ島合宿にて Jegog 演奏グループと（1986 年）

バリ島ジェゴグの小さな歴史

河合 徳枝

人類の宝ともいえるバリ島の巨竹打楽アンサンブル・ジェゴグの起源や変遷については、いまだ権威ある学術研究は存在せず、信憑性に限界のあるものを含むさまざまな説が存在し定説が確立していません。そこで私はこのたび、インドネシア国立芸術大学グスティ・クトゥット・スナ教授、バリ州ジュンブラナ県ヌガ・タンバ県知事らへのインタビューを行い、山城組の半世紀近くに及ぶ現地調査で得られた情報を加えて、その歴史をあらためて俯瞰してみました。

○起源

ジェゴグのプロトタイプは一九一二年、現在のジュンブラナ県サブアル村でキンガ・グリドゥ（呼称、本名不明）によって開発されました。当時の楽器は、木製の鍵盤の下に半分に割った竹を取り付けたものだったといわれます。それがどのようにして現在のような形態になったのかについては諸説あります。

一九一〇年代はバリ島文化が円熟・変革期を迎えた時代です。今では全バリ島にいき渡っている、「炸裂するゴング」という異名をもつ青銅製ガムランの新しい楽器様式〈ゴン・クビャール〉が北部バリで、新しい舞踊様式が中西部などでこの時期に生み出されました。ジェゴグも、そうした変革の渦の中で生み出されたのかもしれません。新しい良いものは、瞬く間に広がるというバリ島の原則にもれず、竹の名産地である西部地域では、家々で行われる各種の儀礼や、収穫の祝いなどの余興・娯楽として演奏されるようになり、そうした中で、どちらかというと競争や戦闘的勇敢さを好む地域性の西部バリ社会で、より大規模で圧倒的迫力を具えた楽器に進化していったのではないかと考えられています。

○途絶の危機

第二次世界大戦、それに続くオランダとの独立戦争下で、ジェゴグの演奏機会は減少しました。しかし、より深刻な危機は一九七二～七三年頃、ジェゴグはほとんど演奏されずに放置され消滅の危機に瀕しました。それは、小規模な竹製ガムラン・ティンクリック による〈ジョゲ・ブンブン〉が大流行したためといわれています。ジョゲ・ブンブンは、踊り手が観衆から相手を指名して代わる代わる人々を引っ張り出し一緒に踊る参加型の芸能です。踊り手と指名された者とは掛け合いでわざと面白おかしく踊って抱腹絶倒の世界を創り出すという、娯楽として強い魅力をもっていました。ジェゴグは青銅製のガムランとは異なり寺院の儀礼に必須のものでないだけに、楽器が小規模で取り扱いが手軽で、かつ娯楽性が高いジョゲ・ブンブンが重宝され、ジェゴグにとって代わってしまったといえます。

○復興と国際化

この状況はすぐに問題視され、ジェゴグ復興の動きが始まりました。その牽引力のひとつになったのは、サンカルアグン村のジェゴググループ〈スアル・アグン〉です。とりわけ、日本人で最も早くバリ島に移住しバリ島文化振興に貢献してきたサリ須戸氏は、父の遺言でジェゴグ復興に取り組んでいたスアル・アグンのリーダー、クトゥット・スウェントラ氏の才能を見抜き、楽器の整備や島内での様々な演奏機会をつくるなど復興活動に物心両面の支援を続けました。スウェントラ氏の伴侶ユリアストゥティ和子氏は、スアル・アグンをグローバリゼーションの波に乗せ、数々の海外公演や海外アーチストとの共演を実現しました。地元の復興活動を後押しした日本人の貢献もあり、八〇年代にはジュンブラナ県でおよそ120のグループを数えるという劇的な復活を遂げました。

そして、CD『ジェゴグ！大地の響』（山城祥二録音・編集一九八四年収録、ビクター音楽産業一九八七年出版）は、驚愕の重低音を含むジェゴグの響きの真髄を初めて本格的に収録することに成功し、ジェゴグ国際化の尖兵となりました。続くアニメ映画『AKIRA』によって、ジェゴグは民族音楽の枠を超えた国際的なファンを獲得しました。

いまやジェゴグは、バリ島の伝統的アンサンブルであると同時に、世界中の人々が現地であるいはメディアを通じて楽しむ芸能となっています。二〇二二年現在も、ジュンブラナ県の65のデサ・アダット（伝統村）におよそ120のジェゴググループが存在し、バリ島文化の一翼を担っています。

CD『ジェゴグ！大地の響』

第二章 解明創発（かいめいそうはつ）

バリ島の巨竹打楽アンサンブル〈ジェゴグ〉の実像は、バリ島外ではほとんど知られていません。さらに、芸能山城組がこのジェゴグにほどこした創発的改良について、本格的に公開したことはありませんでした。

〈逢燦杰極（アキラじぇごぐ）〉の初演に先立つ第二章では、ステージ上のジェゴグを眼前で解体してその秘密を解きあかし、それをステージ上で再び組み上げて打鳴します。

バリ島の伝統的なジェゴグ

竹製打楽器アンサンブル〈ジェゴグ〉（jegog）は、鍵盤打楽器の一種で、バリ島西部ジュンブラナ県固有の芸能です。14台のアンサンブルを基本とし、最大の楽器も〈ジェゴグ〉呼ばれます（図1）。5オクターブに及ぶ幅広い音域をカバーし、なかでも低音は約50ヘルツという非常に低い音を出すことが

可能です。1台の楽器は8本の鍵盤をそなえ、最も大きなジェゴグの鍵盤は、東南アジアを中心に分布する通称ゾウタケ（学名デンドロカラムス・ギガンテウス）と呼ばれる巨大な竹を素材としています。竹を叩くバチは、ゴムや木でできたものを使い分けます。低音を担当する巨大なジェゴグの枠の上に座って重いバチを振り上げて叩く演奏方法は、ジェゴグ独特のものです。青銅製打楽器アンサンブルのガムラン同様、二人一組となって演奏する入れ子奏法（コテカン）がしばしばとられ、完成された旋律を分担して弾くこの技法で、一人で弾くことができる倍のスピードでの演奏を実現します。

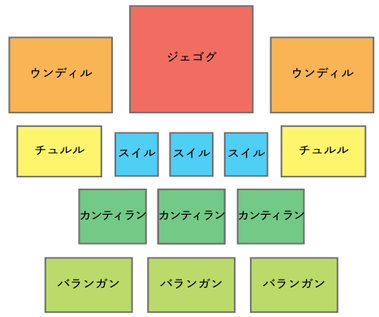


図1　ジェゴグの典型的編成と各楽器の名称

竹を半年ほど乾燥させたのち、根の部分を切り離して節（ふし）を取り除き、鋭いナタで削り出し、上部を打鍵部、唯一節を残した底部を共鳴管とします（図2）。木製の枠には飾り板や彫刻など大変華やかな装飾が施され、祝祭的な雰囲気を醸しだします。

竹筒鍵盤の打鍵部の先端に小さな穴をあけて紐を通して吊り下げ、また共鳴管の下に紐を渡して乗せて支えます。打鍵部をバチで叩くと、共鳴管で音が増幅されるうえ、竹筒が宙に浮いている構造によってその響きが保持され、独特の豊かな響きを生むのです。

ジェゴグの音階は基本的に、4音で構成されます。低音域を担当する楽器では1台の楽器に同じ1オクターブ（4音）の竹筒鍵盤が2セット（図3上）、中高音域を担当する楽器では2オクターブの竹筒鍵盤がセットされています（図3下）。同じ音程の2本の竹筒は、若干音高がずれるように調律（デチューニング）されているため、同時に打鍵した音は空気中で〈うなり〉（差音）を生じます。こうしたデチューニングはガムラン楽器で基本的に発達しました。名人の手によって生み出されるジェゴグの銘器の独特のうなりは、演奏者と聴衆を陶酔させるバリ島独自の伝統の技です。

（藤田奈比古・渡邊有晴）

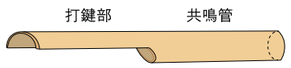


図2　竹筒鍵盤の構造

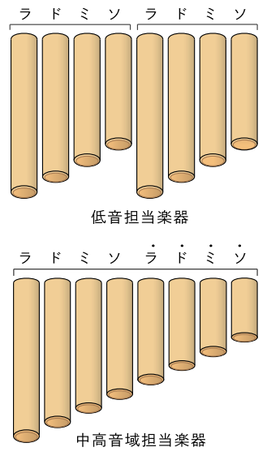


図3　4音階ジェゴグの鍵盤例
（音名は近似的に表現）

芸能山城組によるジェゴグの構造革新

1　ジェゴグの保持骨格の強化

竹筒鍵盤を支える楽器の保持骨格は、特に巨大ジェゴグでは、目の詰まった重い熱帯固有の木材で堅固に造られていて、発音体の巨大な竹筒とその上に乗った演奏者二人を安定して保ち、音をよく響かせるのにきわめて効果的です。

ジェゴグの4音階それぞれの音の高さは、現代社会で支配的な十二平均律（ピアノの調律）とは一致せず、またアンサンブルによってチューニングが微妙に異なります。そのため、現代の音楽シーンに通用する楽曲を生み出すには、音律が不適なうえ、音数が不足していることを否めません。そこで、バリ島伝統の4音階にもう1音を加えることによって、ジェゴグ伝統の響きを活かしつつ、より自由度の高い演奏を可能にすることを図りました。たとえば、竹筒鍵盤を4音（あえて近似的に音名を記すとラ・ド・ミ・ソ）から1本ずつ増やして、5音（ラ・ド・レ・ミ・ソ）にすることです。

しかし、竹筒鍵盤を追加するためには、楽器骨格をより堅固にすることが必須の課題となりました。そこでさまざまな試行実験を繰り返した結果、竹筒を吊る枠の材質を木材から鉄材に造り換えて、強度と剛性とを強化することが有効であることを見出しました。

そして、人の耳に聞こえない帯域に及ぶ重低音を生み出す最大の楽器ジェゴグには、鉄製の柱をその骨格に導入して、竹筒鍵盤を増やしても楽器骨格の強度と剛性とを減じることがないよう大改造を施しました。

2　鍵盤の架け替えによる互いに異なる音律の実現

作曲の自由度をより高めて楽曲の多様性を実現するためには、さらに鍵盤を増やすことが有効と期待されます。しかし、竹筒鍵盤が大きく重い低音楽器では、鍵盤を増やすと楽器骨格に与える負担が大きくなるという困難に直面しました。そこで、低音楽器の鍵盤の数は増やさず5音のまま、1音だけを別の音高に変えて、ジェゴグ本来の響きを保ちつつ趣の異なる音律をつくりだすことのできるオリジナルの構造を開発しました。

そして、低音楽器の竹筒鍵盤を別の音の竹筒鍵盤に架け替えられるように改造しました。一方、竹筒鍵盤が比較的軽く楽器骨格に与える負担が少ない高音楽器は1オクターブ6音の竹筒鍵盤で構成し、楽曲によって演奏する5音を選択する形態を採っています。

（前川督雄）

〈杰極（じえごで）〉の創発

バリ島のジェゴグは、ほとんどの場合、竹の楽器だけで演奏され、他には稀に、ガムランでも使用されるクンダン（太鼓）や金属打楽器チェンチェンが加えられる程度です。また、グループ対抗コンペティションで演奏される際には、チューニングが互いに異なるジェゴグ・アンサンブルが、異なる曲を同時にぶつけ合うように演奏し、最後まで乱れず演奏しきった方が勝ちという闘いのなかで、クライマックスには耳を聾するばかりの爆音に人々は熱狂します。

一方で、このジェゴグというアンサンブルは、どこで音がしているのか、楽器の音なのかどうかもわからない、森が歌っているかのような静かな持続的な響きも奏でることができます。打楽器アンサンブルとしては驚異的な表現の幅をもち、しかもそれが重低音を特徴とする点で、世界に類のないものといえるでしょう。

こうしたジェゴグの特性を活かして創出された、ジェゴグを核心とする新しいオーケストラが〈杰極（じえごぐ）〉です。その音律は、バリ島伝統の4音音階を母体としつつ、多くの人が慣れ親しんだ音律とも調和する独特のものになっています。その結果、シンセサイザーなどの電子楽器、太鼓などの打楽器、人の声までをジェゴグが共生させるという離れ業が実現し、伝統を生かしつつ、バリ島の伝統音律による竹の打楽器アンサンブルという枠組を超えた、世界の現在の音楽と呼ぶことのできるまったく新しい芸術様式が生まれました。

〈杰極（じえごぐ）〉の誕生と、作曲者山城による新たな作品の創出とにより、バリ島のジェゴグに潜在していた表現力が次々と顕在化し、それは現在も開発の途上にあります。

ジェゴグは、一番大きな楽器〈ジェゴグ〉から一番小さな楽器〈スイル〉までがユニゾンで演奏することにより最大の重低音が生まれます。そして、全楽器ユニゾン、またはメロディラインパートと装飾パートにわかれ、それぞれが入れ子奏法で演奏されるという、比較的シンプルな方法で演奏されます。この基本コンセプトに学びつつ、新たに開発した演奏法を組み合わせて、より多彩な表現が生み出されています。今日は、その〈杰極（じえごぐ）〉のはじめての到達点を披露します。

（小野寺英子）